５　次の文章は、歴史家の渡辺京二が娘Ｒへの手紙という形式でつづった文学案内のうちの、「トルストイ『戦争と平和』―歴史を巨大な日常として」である。よく読んで、後の問いに答えよ。ただし、設問の都合で、原文を一部改変した箇所がある。 　　　　　　　　　　〈岐阜大〉二〇一八年度出題

**文学の常識にさからう**

　『戦争と平和』を読んでツルゲーネフは、「これは小説ではなくて象だ」といったと伝えられる。ツルゲーネフがその言葉で、この小説について何を主張したかったのかはともかくとして、これはそうとう気の利いた評言といっていい。

　ツルゲーネフの評言は、この小説が当時の文学界における〝小説とは何か〟という常識に、さからうものであったことを教える。この大長篇が完成したかたちで世に現われたのは、一八六九年だった。文学史的には、リアリズム長篇小説の全盛期であるが、いったいこの小説のどこが当時の文学者たちの驚きだったのか。

　『戦争と平和』は、まず、とほうもなく長い小説である。登場人物は、もの好きの計算によると五五九人におよぶ。だが、人びとはそれに驚いたのではあるまい。長い小説というものはすでにあった。十九世紀ロマンは外形的には、  
ａサイミツな描写と時間の持続を特徴としているから、どうしても長くなる傾向をもつ。１『戦争と平和』はその傾向の頂点に立っているにすぎない。

　トルストイが、一八〇五年から一二年にいたるロシアとナポレオンの戦争という、巨大な歴史的事象をとりあげたのが、人びとの驚きだったのだろうか。当時ペテルブルグの社交界では、「これはトルストイ伯爵の指揮したナポレオン戦争だ」という評言が流行したという。だが、世の中に歴史小説というものが存在する以上、それが人びとの真の驚きではなかったはずだ。

　トルストイは、この小説のなかに、純粋な論文といっていいような歴史に関する哲学的考察を、しばしばさしはさんだ。ながい部分では、それは数十ページにわたっている。当時小説は、哲学的省察を排除して写実に徹底する方向にあったから、このことは、小説の効果を損ずる作者の道楽としてひんしゅくを買った。フロベールは、この大作の前半に感歎しながら、第三巻以後の哲学的議論にはｂ閉口したと伝えられる。しかしそれだけなら、人びとは閉口はしても驚きはしなかったはずである。草創期においては、小説はしばしば、こんなふうに思想的省察を物語のあいだに交えるものであった。

　ではこの小説の文学界の常識にさからうような新しさとは、何だったのだろうか。それはいわば、物語の枠組のとりかたにかかわっていた。それまでの小説は、どんなに長いものでも、恋なら恋という主題で、起承転結のある物語をかたちづくっていた。それは、ストーリーの枠組にしたがって、現実を切りとるものだった。もちろん『戦争と平和』だって、現実を切りとっている。２ただ、その切りとりかたが、これまでの恋や権力や金銭にまつわるかけひきの物語、あるいは人生的ななやみについてひとつの意匠を提示する物語と、おそろしくちがっていた。

　おそらく当時の人びとは、トルストイが、現実をまるごと提示しようとしていることに、驚いたのだ。ツルゲーネフは象というかわりに、この小説を「世界」と呼んでもよかったのだ。たかが小説で、世界の全体像を描ききろうというのは、とほうもないことである。小説はあくまでも、人生のｃイッペンを物語という形式で切りとるものだという人びとの常識は、この小説によって揺るがされた。人びとには、トルストイが現実を切りとらず、まるごと抱えあげようとするもののように見えたにちがいない。

**全体小説の創始**

　もちろんこの小説のなかには、それまでの小説とおなじような「物語」がふくまれている。たとえば、アンドレイ・ボルコンスキーとナターシャの恋物語がそうで、私の経験でいうと、はじめてこの小説を読んだとき、たまたま第二巻だけしか手に入らず、その部分をちょうど独立の物語のように満足して読んだことをおぼえている。この第二巻がアンドレイとナターシャの恋物語の部分で、『戦争と平和』はそういう読みかたも許す小説なのである。

　だが、この小説がほかの小説とｄ著しくちがうのは、アンドレイとナターシャの物語をはじめとして、ほかのいくつかの物語的部分がそれだけのものとして完結しておらず、たえずもっと大きな関連のなかに組み入れられていることである。いわばそれには、大きな背景が与えられている。その背景とは、たとえばナポレオン戦争であり、ロシアの貴族社会であるが、それははたして背景であるのか、主人公でないのかというのが、この小説を読む私たちの自然な感想であるはずだ。

　しかし、その主人公はナポレオン戦争でもなければ、ロシア貴族社会でもない。この小説にはたしかに、一八〇五年と一八一二年の対ナポレオン戦争が大きなｅヒジュウで描かれている。アウステルリッツやシェングラーベンやボロジノの戦闘が描かれ、ナポレオンとクトゥーゾフの個性が対比され、将軍たちの作戦の意味さえ論じられている。しかし、その戦闘の描きかたを見れば、トルストイがそれを、歴史的事件としてよりはむしろ巨大な日常として描いていることがわかる。

　戦争はけっして、指揮官や参謀の思うようには動かない。これは、トルストイが示そうとした戦争哲学であるが、この小説で描かれた戦闘は、そういう戦争哲学よりも、３実際に戦場に立った人間に戦闘がどういうものとして現われるかという、おそろしい真実に基づいている。この小説のなかでは、戦争は歴史小説ふうに描かれていない。ただひとりの人間がｆソウグウした、事実として描かれている。ひとりの人間が家庭のだんらんからひっぱり出されて、わけもわからずに投げこまれた巨大な混乱としてとらえられている。参加している本人はわけがわかっているつもりでも、ほんとうは盲目なのだと、トルストイはいっている。

　だから『戦争と平和』は、歴史小説などではない。もちろん恋物語でもない。ピエールやアンドレイの人生論的な追求があるからといって、哲学小説でもない。それはただ、ナポレオン戦争時代のロシア人の生の意味をつきつめようとした小説である。十九世紀初頭の感情ゆたかなロシア人にとって、宇宙とは、世界とは、生とは、何であったかということを示そうとした小説である。４生はあくまで連関のなかで示される。アンドレイとナターシャの物語は、だから、けっしてそれ自体で完結しない。すべての主人公たちは、いわば天と地のあいだを往復する。彼らの世界は、日常に属する個人的なドラマと、世界史的な事件との連関のなかにしか成り立たない。

　こういう小説は、何と呼ばれるだろうか。全体小説と呼ばれる。全体小説とは、個人の運命がけっして個的なものとして完結せず、かならず世界史的な政治や、革命や、戦争に連関してしまう二十世紀の文学理想だった。トルストイは『戦争と平和』で、そういう全体小説の創始者となった。この小説の新しさ、いったいこういうものが小説だろうかと疑うような新しさは、そこにあったというべきだろう。

**統一された生への信仰**

　だが、二十世紀の新しい文学理想となった全体小説は、けっしてゆたかな果実を結んだとはいえない。多くの作家がトルストイにならって、たとえ手法は古典的なリアリズムでなくとも、世界全体を小説のうちに現わそうとする冒険を試みてきた。しかし彼らは、トルストイのような成功をｇ収めることができなかった。

　その理由は、作家が立つ時代的状況のちがいもふくめていろいろ考えられるけれど、ひとつだけ肝心なことをいっておけば、トルストイが描き出そうとした「全体的な生」と、二十世紀の作家たちがつかもうとしたそれとのあいだに、５大きなちがいがあったからだと考えられる。

　トルストイには、全体的な統一された生というものに対する信仰があった。統一しているものはむろん見えざる神の手であって、トルストイにとっては生はひとつの神秘で、人がよりよく生きようとすればするほど輝き出るような永遠の泉だった。二十世紀の作家にはこういう確信は失われていたから、彼らは全体を求めようとして、［　Ａ　］におちいったり全体の［　Ｂ　］を示すだけだった。

　トルストイはあくまで、全体は日常のなかにだけあると信じていた。神は細部に宿りたまう、ということわざがある。トルストイは、全体は日常に宿ると信じていたといってもいい。この巨大な小説の本質は、私の考えでは家庭小説である。人間の日常は、くりかえしとして現われる。このくりかえしこそ、人間の生の本質であり全体への通路だと彼は信じた。

　『戦争と平和』の文学史上の革命的な新しさは、そこにあった。人間が、お茶を飲んだり、子どもの世話をしたり、踊りをおどったり、友人といさかいをしたりするささいな日常を、このように自己目的的に描いた小説はそれまでになかった。ただそれが６わが国の特産である日常身辺小説とちがうのは、トルストイが、そのような家庭生活の細部を全体の宿るところと解していた点にあった。

　彼は、狩猟やクリスマスのｈカソウなどのロシア地主生活のたのしみを描いて比類のない表現に達したが、そのさいかならず、それをたんなる家庭生活の細部と見ず、全世界の存在の意味がかかるものとして描いた。森から現われた狼を追う犬たち、それとともに高鳴る人びとの心臓、ｉ疾駆するトロイカをめぐる冬の夜の曠野、そういったものに人間の生存感がどんなふうに結びついているか、けっして理屈としてではなく感覚として示そうとした。

**さながら神のように語る**

　彼は、人の生存の意味をそういう生活の日常から理解した。アンドレイも、ピエールも、ニコライも、ナポレオン戦争という世界史的事件に巻きこまれ、自分なりに、その事件とそこでの自分の役割を理解しようとする。しかしトルストイは、世界史的事件と日常とのあいだの、めくらむような距離を往復するそういう人間たちの生を、あくまで日常という基底から把握しようとした。世界史的事件とは、日常という生の実体のうえを移ろう影なのだと、彼はその小説全体で主張した。この低いまなざし、より正確にいえば、大地にうずくまってもっとも高いところまで見とおそうとする視線こそ、トルストイが世界文学にもちこんだ革命だった。

　この小説のエピローグに描かれた諸人物の像、青春を時代の激浪のうちにすごし、それなりにｊ昂揚した生の瞬間をもった諸人物が、平凡な家庭人として収まっている情景の描写こそ、７この偉大な小説の真の勝利を示している。

　トルストイは、この小説に、三十代後半のもっとも精力的な日々を捧げた。巨大な芸術家として彼は、この小説で神のごとく語った。人間の性格についても、性格の本質が現われる場面をとらえて、彼はさながら神のようであった。かくれているものが現われる瞬間の描写、自然についても人間についても、この小説は、その点でまったく人の手に成る作品ではないような印象を与える。

　Ｒ…、私はこれで、この小説を五回読んだ。死ぬまで、あと一度は読みたいと思っている。この小説は、いわば人類史の奇蹟だと思う。人類は二度とこんな小説を生むことはあるまい。

（渡辺京二『娘への読書案内　世界文学23篇』（一九八九年）より）

（注）

『戦争と平和』…トルストイ作の長篇小説（一八六五―一八六九）。十九世紀前半のナポレオンのロシア遠征を背景として、ロシアの貴族社会での恋物語を中心に、富裕な貴族と惨めな農奴、官僚と地方貴族の対立といった両極構造を通して時代を描いた。

ツルゲーネフ…ロシアの小説家（一八一八―一八八三）。トルストイ、ドストエフスキーと並び称される。代表作は『猟人日記』、『父と子』など。

トルストイ…ロシアの小説家（一八二八―一九一〇）。代表作に『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』など。貴族の出身だが社会事業にも関心が深く、後年は原始キリスト教的な非暴力主義の思想家としても活動した。

フロベール…フランスの小説家（一八二一―一八八〇）。写実主義を確立した『ボヴァリー夫人』などで知られる。

アンドレイ・ボルコンスキーとナターシャ…『戦争と平和』の中心となる恋愛の当事者たち。アンドレイは大貴族ボルコンスキー公爵家の跡取りで、中流貴族ロストフ一家の娘ナターシャの婚約者。ボロジノの戦闘で致命傷を負い、ナターシャと妹マリアに看取られて死ぬ。

アウステルリッツやシェングラーベン…アウステルリッツは一八〇五年、ナポレオンのフランス軍がロシア・オーストリア連合軍を破った戦いを指す。アンドレイとニコライも軍人としてこれに参加し、アンドレイは負傷する。シェングラーベンはそれに先立つ局所戦。

ボロジノの戦闘…ナポレオン軍が初めて敗戦を喫した一八一二年のロシア軍との戦いでの、最初の戦闘のひとつ。

クトゥーゾフ…帝政ロシア時代の軍人。『戦争と平和』では彼は、素朴なロシアの民衆たちの統合の象徴として描かれている。

ピエール…『戦争と平和』の主人公の一人でアンドレイの親友の内省的な青年。モスクワでフランス軍の捕虜となり、帰還後にナターシャと結婚する。

ニコライ…ナターシャの兄で、健康で正義感が強い軍人。のちにアンドレイの妹マリアと結婚し、破産した実家を立て直して大地主として成功する。

エピローグ…小説などで、登場人物のその後を述べる最終章のこと。『戦争と平和』のエピローグでは、ナターシャ、ピエール、ニコライらのその後が語られる。

問１　傍線部ａ～ｊについて、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで記せ。

問２　傍線部１「『戦争と平和』はその傾向の頂点に立っているにすぎない。」を、適宜ことばを補って、文意が明らかになるように書き直せ。

問３　傍線部２で指摘されている、『戦争と平和』における現実の切りとり方とそれまでの物語における現実の切りとり方との違いを、端的に示している一文を本文中から選んで、その冒頭の五文字を書け。

問４　傍線部３「実際に戦場に立った人間に戦闘がどういうものとして現われるかという、おそろしい真実」とはどのようなことを指しているか。簡潔にまとめよ。

問５　傍線部４「生はあくまで連関のなかで示される。」とはどのようなことか。わかりやすく説明せよ。

問６　傍線部５「大きなちがい」とはどのようなちがいか。それぞれの作家を対比して、説明せよ。

問７　［　Ａ　］、［　Ｂ　］に当てはまる語を、それぞれの語群から一つ選べ。

Ａ　陳腐　　虚飾　　図式　　典型

Ｂ　一部　　詳細　　残余　　形骸

問８　傍線部６「わが国の特産である日常身辺小説」について、次の各項目の中からそれにもっとも近い作品を一つ選べ。

ａ　舞姫　　ｂ　羅生門　　ｃ　こころ

ｄ　城の崎にて　　ｅ　山月記

◎問９　傍線部７「この偉大な小説の真の勝利」とはどのようなことを指しているか。本文中の語を用いて、筆者の考えをまとめよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝細密　　　ｂ＝へいこう　　ｃ＝一片　　ｄ＝いちじる

ｅ＝比重　　　ｆ＝遭遇　　　　ｇ＝おさ　　ｈ＝仮装

ｉ＝しっく　　ｊ＝こうよう

問２　Ａトルストイの『戦争と平和』が途方もなく長いのは、Ｂ細密な描写と時間の持続を特徴とする十九世紀ロマン小説の到達点にあるからにすぎない。

Ａ・Ｂがそろっていなければ全体０。

Ａ＝４〔「途方もなく」という内容がなければ減点２。「長い」という内容がなければ不可。〕

Ｂ＝６〔「細密な描写と時間の持続」という内容がなければ減点２。「十九世紀ロマン」という表現がなければ減点２。「到達点にある」という内容がなければ減点２。〕

問３　だが、この

問４　ひとりの人間がＡ家庭のだんらんという日常の場からひっぱり出され、　Ｂわけもわからず戦争という巨大な混乱の中に投げこまれていること。

Ａ・Ｂがそろっていなければ全体０。

Ａ＝５〔「家庭のだんらん」という表現がなければ減点２。「日常」という語がなければ減点２。〕

Ｂ＝５〔「わけもわからず」という内容がなければ減点２。「戦争という巨大な混乱」という表現がなければ減点３。〕

問５　Ａ日常に属する主人公たちの個人的な出来事や運命は、Ｂけっしてそれ自体で完結することはなく、Ｃかならずその時代に生起する世界史的な事件とＤつながりをもった形で描き出されているということ。

Ａ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔「日常」という語がなければ減点２。「個人的な」という語がなければ減点２。〕／Ｂ＝２

Ｃ＝３〔「世界史的な事件」という内容がなければ不可。〕／Ｄ＝２

問６　Ａトルストイには全体的な統一された生というものに対する信仰があり、Ｂ全体は人間の生の本質である日常に宿るので、Ｃ日常を描くことが全体的な生に通じると信じていたが、Ｄ二十世紀の作家たちにはその確信がなく、Ｅただ全体をそのまま描こうとしたというちがい。

「トルストイ」と「二十世紀の作家たち」が対比されていなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝２

Ｅ＝２〔「全体をそのまま」「ただ全体を」など、全体を直接描こうとしているという内容がなければ不可。〕

問７　Ａ＝図式〔「虚飾」でも可。〕　　Ｂ＝形骸

問８　ｄ

問９　Ａ青春を時代の激浪のうちにすごし、それなりに昂揚した生の瞬間を持ちつつも、平凡な家庭人として収まっている諸人物を描写することを通して、Ｂ世界史的な事件に巻き込まれながらも自分なりに自分の役割を理解しようとして日常を生きた人たちの生存の意味を、あくまでも日常という基底から把握し得たこと。

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４〔「青春を時代の激浪のうちにすごす」「昂揚した生の瞬間を持つ」「平凡な家庭人として収まる」という表現がなければそれぞれ減点１。〕

Ｂ＝６〔「世界史的な事件の中で自分の役割を理解しようとする」「日常を生きた人たちの生存の意味」「日常という基底から把握する」という内容がなければそれぞれ減点２。〕